

ウルリム
響

星 環

特定非営利活動法人
聖公会生野センター機関誌
第 51 号
2009 年 11 月 20 日発行
題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: ikuno@nskk.org

聖公会生野センター 検索

宣教 150 周年記念プログラムで聖公会生野センターもブースを
だし、アピールしました (9/22 立教大学)



宣教 150 周年記念礼拝代祷 9 月 23 日、カトリック教会の東京カテドラル聖マリア大聖堂で日本聖公会宣教 150 周年礼拝で
代祷をする呉光現総主事



醤油味の「牛喜鍋」が美味しい。若いマスターががんばっています。生野区小路 2-8-15 TEL.06-6753-0165【牛喜(ぎゅうよし) 休み不定：5時から】

御幸森神社 (御幸森天神宮)
生野区桃谷 3-10-5 (JR 環状線鶴橋駅・桃谷駅から徒歩 10 分)



難波の津

日本に漢字を伝えた百済の王仁博士が詠んだと言われる
「難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花」
の日本語とハングルの碑が生野区の御幸森神社に建立されました。江戸時代の朝鮮通信使がハングルで書いたと言われてい

知らずに犯した過ち、隠れた罪から、 どうかわたしを清めてください

三浦恒久

「知らずに犯した過ち、隠れた罪から、どうかわたしを清めてください」(詩 19:13) この詩編の言葉を聞き、読み、祈るたびに、わたしの心は痛みます。そして、この言葉をわたしの自戒の言葉として、生涯決して忘れまいと心に決めています。その理由をお話したいと思います。

わたしは1950年、青森県東津軽郡三厩(みうまや)村というところで生まれました。わたしが小学生のころは、人が亡くなったとき、地域の人たちが助け合って、なくなった人をお送りしていました。その助け合いの一つが、火葬のための薪を家々で、ひとかかえほど持ち寄ることでした。



聖餐式で子どもに祝福をする三浦司祭

火葬場は小学校の校舎から少し離れた、グラウンドの途中にありました。火葬場と言っても、それらしき建物はなく、10坪ほどの土地があるだけでした。目印は一本の松の木でした。地域の人たちは、そこに薪を運ぶのです。

その火葬場には、人が亡くなると、火を守る初老の男が現れました。その男は地域でも大酒飲みとして、指をさされるような人でした。運びこまれた薪は井形に組まれ、葬儀を終えた棺が運ばれてきて、組まれた薪の上に置かれます。あとは火守りの男の仕事です。

火守りの男はよく酔っぱらって、道路の真ん中を歩いていることがありました。赤ら顔で口をとがらせ、何かぶつぶつ言い、腕を左右にゆらしな

がら。それはまるで海のタコのような姿でした。わたしたちいたずらっ子は、そのような彼を指さして、「タコ、タコ」と言っははやし立てました。

それから20数年たったある日、ある人権学習会の中で、「踏まれた足の痛さは、踏んだ人にはわからない」という言葉に出会ったとき、わたしははっきりと気づかされました。火守りの男は、わたしたちの嫌がる仕事をしていたのでした。薪に火をつけ、遺体をだびに付す仕事は、つらい仕事だったと思います。長い鉄の棒を持ち、異臭のする中で、彼はつらい仕事を続けていたのです。きっと酒を飲まずにはいられなかったのでしょう。そのことに気づかされたとき、わたしは本当に申し訳ないと胸をたたきました。たとえ小学生であったとしても、ゆるしがたい行為だったと思います。

冒頭の詩編のみ言葉を唱えるたびに、わたしの脳裏にはあの情景、「タコ、タコ」と言っははやし立てた自分自身の姿がよみがえってきます。「本当に申し訳なかった」わたしはおわびする以外にどうすることもできません。

「知らずに犯した過ち、隠れた罪から、どうかわたしを清めてください」この祈りの言葉を、わたしは生涯祈り続けていきたいと思っています。

(みうら つねひさ 司祭 京都教区
桃山基督教会牧師)

わたしが韓国・朝鮮に関心を持つようになったきっかけの一つは、韓国歌曲である。中学生の頃からKBS (Korean Broadcasting System 韓国放送公社) 国際放送(日本語)を聞いていて時々流される歌曲が大好きになった。

ヨーロッパの音楽が日本に入って、滝廉太郎「荒城の月」や山田耕筰「この道」などをはじめとする日本歌曲が生まれたように、韓国でも歌曲が作られるようになった。その草分けとされるのが洪永厚(号は蘭坡)。日本による植民地統治の時代である。

1898年に生まれた洪蘭坡は、翌年ソウルの貧洞に転居した。大韓聖公会ソウル大聖堂のすぐそばである。日韓保護条約が強制的に締結された1905年に永信学校(長老教会系)に入学、日本による韓国併合の1910年、YMCA中学部に入学した。

彼の一家は、韓国最初の教会と言われるセムナン(「新しい門内」という意味)教会に属していた。手元にある『セムナン教会文献資料集』第1集を見ると、「教友問答冊」1911年7月13日の記録に彼の名前が出てくる。信仰の試問を受ける式(洗礼問答式)の記録である。彼はその後、セムナン教会諸職会(教会の役員会)のメンバーとして活動した。

洪蘭坡は1918年、上野の東京音楽学校(現在の東京芸術大学)予科に入学した。しかし翌1919年、独立運動が勃発。彼は大切なバイオリンを質に預け、それによって得たお金で独立を訴えるパンフレットを作成、留学生仲間配った。こうして彼は日本の官憲に追われる身となり、やむなく帰国せざるを得なかった。

翌1920年、音楽への志を抑えがたく、彼は東京音楽学校本科に進もうとしたが、不穩思想の持ち主ということで拒絶されたという。その年、彼は自作の小説のために「哀愁」というバイオリン曲を作曲した。その曲は、1925年頃、永信学校で音楽を担当していた金亨俊が国を奪われた悲しみから作った鳳仙花の詩を得て、韓国最初の歌曲とされる「鳳仙花」が誕生した。金亨俊の詩を直訳に近い形で記してみる。

1垣の下に咲いた鳳仙花よ おまえの姿は

あわれだ
長い夏の日 美しく 花咲くころ
うるわしい少女らが おまえを愛でて遊んだ
2いつしか夏は行き 秋の風がそよそよと吹いて
美しい花房を むごくも侵した
花が落ちて しおれて おまえの姿はあわれだ
3北風寒雪 冷たい風に おまえの形がなくなっても
平和な夢をみる おまえの魂は ここにある
のどかな春の風に よみがえることを願う

痛切な言葉とメロディーのこの曲は、第3節で民族の再生を歌っている。わたしはこれに触れるごとにイエス・キリストの十字架と復活を思う。イエスの復活は、虐げられた者の力、希望である。

洪蘭坡はその後、広く音楽活動を展開し、『朝鮮童謡百曲集』『朝鮮歌謡作曲集』などを発行した。しかし1937年、反日独立を企図したとする「興士団事件」に連座して3ヵ月間獄中生活を強いられ、その時の拷問がたたったのであろうか、1941年に44歳で死去した。翌1942年、「鳳仙花」はソプラノ歌手・金天愛によって歌われ、そのレコードによって広く愛されるようになった。ほかに洪蘭坡の歌曲としては「船頭の歌」「春の乙女」「成仏寺の夜」、童謡では「故郷の春」「虹」などがよく知られている。

2008年4月、韓国の民族問題研究所は、『親日人名事典』に収録する4776人のリストを公開した。この中には洪蘭坡の名前も入っている。日本統治下、軍歌などを作曲した罪が問われたのである。わたしは日本人としてこのことのは非を論じる資格はない。しかし、民族再生の切なる祈りを「鳳仙花」に託した音楽家を、日本軍の士気高揚のために利用した日本帝国主義の悪魔的罪こそが問われるべきであると思う。

三・一独立運動90周年を記念する今年、日本の地で独立万歳を訴えて苦しみを受けた洪蘭坡の名を、その信仰とともに記憶したい。

(いだ いずみ 京都聖三一教会牧師)

韓国歌曲の始まり
—— 洪蘭坡のいっしん

井田泉

大阪の寛容、落語『代書』の頃

金光敏

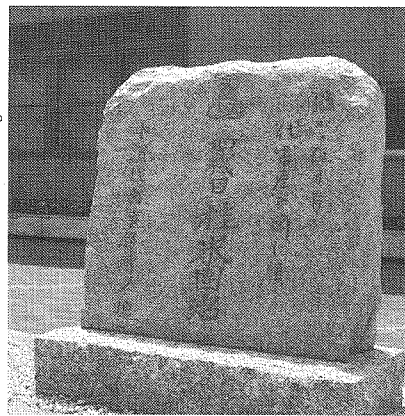
1920年代から太平洋戦争突入の直前かけ、大阪は東洋のマンチェスターと呼ばれ、東京を追い越し、世界有数の経済都市として栄えた。大大阪時代とも表す。この時期、朝鮮半島はすでに日本の植民地支配下にあり、朝鮮人が様々な理由で日本に渡り、大阪にも多く集まってきていた。「君が代丸」は済州島から植民地下の民を大阪に集結させる船であった。大阪市の人口が爆発的に膨らんだ1940年初頭。人口300万人の1割が朝鮮半島出身者だった。大阪は新興経済都市の担い手として朝鮮半島出身者を吸収したのである。

さて先般、桂小米朝師匠が、五代目桂米団治を襲名された。先代の桂米団治師匠は人間国宝桂米朝師匠の師匠であり、上方落語『代書』を創り上げた人で知られている。『代書』は、四代目が生前に東成区役所前で実際に代書屋を営まれていたことから生まれた。最近では、燻し銀三代目桂春団治師匠が得意とされ、落語界の爆笑王故桂枝雀師匠も生前によく演じられた。ただ、ネタはアレンジされたものであり、オリジナルの『代書』は長らくタブーとされ、少なくとも放送では流れないものとなっていた。

落語『代書』は、上方落語で唯一、朝鮮人が登場するネタである。1973年に桂米朝師匠が演じられたオリジナルのネタをCDで、今春五代目桂米団治師匠が演じられたものを落語会で聞いたが、『代書』にとって朝鮮人の登場場面は大切な壺になっている。ただ、その部分こそがタブーとされたのだ。

四代目が代書屋を営んでいた東成区役所のあたりは、朝鮮人が多く暮らす旧猪飼野のはずれ、客には朝鮮人が多かった。朝鮮語なまりの日本語のリアルさには感心する。特に重要なのは、済州島なまりであるところ。私は子どもの頃から聞いてきた済州島なまりの日本語なので郷愁すらある。

『代書』で描かれているのは、字の読み書きが



東成区役所に建てられた落語「代書」の碑
上方落語で有名な「代書」は実は当時の東成区役所の隣で「代書屋」を営んでいた体験を元に作られました。現在はカットして演じられていますが、話の中で当時の朝鮮人も出てくるのです。

できない客と代書屋との珍問答。爆笑ネタと云っていい。ある古老にこのネタを聞いてもらったところ、戦前は字の読み書きができない人が多かったから、代書屋で滑稽に受け答える客の姿に人々は自分自身を重ねたんやろうなあと述べられた。『代書』は、字の読み書きのできない客の無学を笑うより、むしろ、無学の客に翻弄される代書屋の戸惑いぶりが笑いを誘っている。済州島出身者が登場する場面も同様で、噺は人情味に溢れ、タブー視されるようなネタには到底思えなかった。

ただ、時代は今。四代目がクリスチャンであったことや朝鮮人に親切だったことを知らず、あるいは読み書きのできない人々の悲哀に触れたことなく、このネタを聞けばどうか。うーん、やはり客の無学を笑いの的にするやも知らず。諧謔も時代と共に移ろうので仕方あるまいか。

大大阪時代の頃、大阪は多様性に満ちていた。大阪の経済を支えた商工業の工場群には朝鮮人以外にも、薩摩、奄美、琉球の人々が多かった。彼らも朝鮮人同様、言葉の苦勞は大きかった。大阪は“ちがい”ある他者との協働で、近代を遂げた都市だと言っている。

四代目桂米団治師匠の『代書』で描かれた朝鮮人と代書屋との問答には、その頃の大阪が持っていた“他者”へのまなざしが描かれていると私は思っている。もちろん、植民地支配による貧困と差別が朝鮮人を苦しめていたし、その痛みから完全に解き放たれたわけでもない。ただ、朝鮮人に対して温かに向き合った四代目桂米団治師匠のような大阪人がいた事実も知りおきたい。いいのは、四代目がごく普通の人だったことだ。

今春、東成区役所の敷地の一角に四代目桂米団治師匠の顕彰碑が建立された。東成の人々の街づくりの賜物だが、顕彰碑の前で大阪の“よさ”について考えた。そして、たどり着いたのは、多様性に溢れ、ちがいに寛容な大阪の街の風景であった。落語『代書』の頃、日本全体は軍国主義だった。だが、戦争が激化するすぐ直前まで、独特のヒューマニズムで生きようとした大阪人がいた。不幸は、こうした人々も軍国主義は冷徹に戦争へと駆り立てた。大阪のよさが全体主義に飲み込まれた瞬間であった。

隣国の態度に社会はかまびすしい。願わくば、大阪だけは他とちがうまなざしでいてほしい。落語『代書』の頃の大阪の寛容で。

(きむ くあんみん NPO法人コリアNPOセンター事務局長)

クリンもだん美術教室の今とこれから…

大澤辰男

最近、ちまたでは障がい者の美術がたいへん注目され、ブームとなってきています。さまざまな障がい者の施設が積極的に美術活動を取り入れ、作品制作を利用者の余暇活動だけにとどめず作品を商品化し販売を行い、利用者の仕事にしていく努力をしています。

そして、大阪では大阪府庁が、障がい者美術の支援を今年から始め、作品を使った商品を販売している施設と企業を結び付ける支援や障がい者アーティストの発掘、公募展の開催を計画しています。このように障がい者美術の理解と認識が広がっています。

クリンもだん美術教室が始まって今年で17年目となり、僕が教室の講師になって10年になります。10年前、最初に教室に来た時は、受講生はほとんどが学齢期の人で誰もきちんと絵を描いている子はいませんでした。ふざけて

走り回る子や持ってきたお弁当を受講中にずっと食べている子、絵本を読んでいる子、絵を描いても飽きて、すぐに「できた」と言って遊ぶ子。そんな子ばかりでした。そのころの教室は、受講生も7人程で、まだ教室に名前もなくただ絵画教室と呼ばれている小さな学びの場でした。

今のクリンもだん美術教室は、受講生が32人(障がい者26人・健常者6人)になり、大阪だけでなく京都、奈良、神戸から来ている受講生もいます。そして、受講者数の増加とともに活動機会が増え、今では画廊で個展やグループ展を催し、大きな美

術展に出展させてもらえる受講生も出てきました。今年の7月から来年の4月までほとんど毎月、個展やグループ展が企画されています。今の状況から10年前の状態を思い出すと、このような教室になるとは想像も出来ず、感無量です。これも受講生一人ひとりが、がんばってきたことと、なによりも受講生のご家族のご理解があった成果だと思います。

前述の障がい者美術の盛り上がりや理解の広がりの中にクリンもだん美術教室もあります。私たちの教室は17年間、障がい者の美術指導にたずさ



わってきています。専門的指導になってからも10年経ちます。ようやく、外の社会に受講生たちの作品を発信できるまでになり、社会も障がい者美術を認知する機運が出来てきました。とても良い時期に教室の活動期が重なってきていると思います。

これからのクリンもだん美術教室は、この機運を逃さずに受講生一人一人がどうしたら美術を楽しみながらやり続けられるかを考え、世の中に出していけるようにしていきたいと考えています。同時に、クリンもだん美術教室が今までに培ってきた美術指導の成果を社会に発信し、これからの障がい者美術に役立てるような存在になっていきたいと考えています。

(おおさわ たつお クリンもだん美術教室アートディレクター・専任講師)

彼の名は、オ・クアンヒョン

中村 香

たった一人の知り合いがそこにいることで世界がぐっと近づくように、私にとってオ・クアンヒョンは在日を、韓国を、そしてチェジュドを引き付けた人物である。

彼との最初の出会いは、2000年のSCM現場研修から始まる。大阪の生野と釜ヶ崎に行って、在日韓国朝鮮人の社会を、日雇い労働者の実態を直接見て感じるプログラムであった。私は釜ヶ崎の方に参加したのだが、生野組と合流したときに生野の様子を聞いてみた。曰く、ある講師が日本人のとある質問に対して、ほうきを振り回して激怒したというのだ。・・・彼である。生野も釜ヶ崎も深刻な問題を抱えている地域であるがゆえに、よそ者が現場に入り込み当事者に出会うこと自体、常に緊張感を抱かせる。その話を聞いただけで身震いがして生野の方に参加しなくて良かったと心底思った。彼は何に対して激怒し、なぜほうきを振り回さなければならなかったのかということも知らないままに。翌年、私は生野に参加した。

その後、聖公会の韓日青年交流キャンプ（於韓国）に参加したとき、彼は通訳としてやってきた。私は再び緊張した。韓国の従軍慰安婦のハルモニの話を聞きにナヌメチプ（分かち合いの家）を訪問した。そのときの通訳者は韓国人の男性と、彼の二人であった。ハルモニの証言が始まった。性の奴隷となって日本人兵士にされたことを淡々と語るハルモニの横で、韓国人の通訳者が言葉をつまらせ涙した。それで次は彼が横にいて通訳をするのだが、しばらくしてやはり涙を流し胸を押さえ「ごめんごめん」と言いながら通訳を交代する。ハルモニの言葉を一度飲み込み、頭で変換し口から出す行為が痛々しかった。そうやって私たちはハルモニの言葉を通訳してもらった。ハルモニの痛み、韓国人の痛み、在日の痛みを垣間見た瞬間であった。

今年の9月にチェジュド4・3事件と旧日本軍遺跡をたどるスタディーツアー（アジア国際夏期学校主催）があった。彼は校長だという。「俺がやってもいいねんけど、まあ色々あって大変やんか。香ちゃんやってくれへんか〜」。通訳の補助を頼まれ私もついにチェジュドへ足を運んだ。“ついに”というのはチェジュドが初めてということではない。チェジュドは2回行ったことがあったが、新婚旅行に観光に有名な、表向きのまぶしいチェジュドしか知らなかった。チェジュド4・3事件を本格的に学びに行くのは初めてだったのだ。彼がチェ

ジュド4・3事件について何かとつてもなく力を注いでいるのは何となく知っていたがその中身を知らなかった。全く知らないがゆえに質問することさえできず今まで来ていた。

おそらくウルリムを読んでいる人の中でも、「済州島四三事件」という単語を頻りに目にしながらも内容を知らない人が少なからずいるであろう。私も原稿を書いているながらもその一人であった。しかし私は彼を知っている以上、いつかはこの問題にぶちあたるであろうと思っていた。ウルリムを読んでいる人も読んでいる以上、いつかぶちあたるはずだ。「済州島四三事件」を知らなくても、覚えていればいつか。

なぜ彼がこんなにも必死にチェジュド4・3事件に対して運動をしているのか。それは、彼のルーツがチェジュドであり、チェジュド4・3事件の犠牲者、3万人と推測されるその中に、彼の叔父の名が刻まれているからだ。59年前に亡くなったのに、3年前までどこで亡くなったのかも分からなかったという。

スタディーツアーは9月14日から17日にかけて行われた。10月3日は韓国の旧盆（法事）で9月は墓の草刈りを行うシーズンである。韓国の墓は土葬で、緩やかな小さな山形をしており、自然に草が生えている。一人ずつ安置されているので、墓の量も多くなる。夏に草はぼうぼうと繁り墓は見えなくなるのだが、それを一つ一つ草刈りするのは重労働である。一年に何度も墓参りをする韓国は墓の管理が本当に大変だ。

彼の両親の墓は、チェジュドにあった。普段はチェジュドに住んでいる3番目の叔父さんをはじめとした親戚が管理をしてくれているが、2年に一度は必ずチェジュドに来て、草刈りと墓参りをするという。家族共同墓地なので両親をはじめ、親戚一同がそこに安置されているのだが、チェジュド4・3事件で亡くなられた遠い親戚と、彼の2番目の叔父さんの墓がそこにあるというので、私たちは、墓を訪問させて頂くことになった。

彼の父、オ・グシクは、1920年代に君が代丸に乗って、日本は大阪に渡り、彼の母、カン・ドゥソンと結婚し町工場をして暮らしていた。彼が小学生の時には生活に困り、今日食べるお米に困っていたのに、チェジュドの親戚にはお金を送っていたという。「当時それ知っとたら許されへんかったと思うで。今となっては分かるけどな」。チェジュドの旅館でお酒を飲みながら何度も口にしていた。

日本での50年以上にわたる生活を終え彼の父と母の墓はチェジュドにつくられた。日本に住む子ども、2世代の間で論争もあったであろう。しかし、チェジュドで憩うのが父の願いであったという。かくして彼は2年に一度はチェジュドにお墓の草刈りで訪れる。

墓はチェジュドの南に位置するということろにあった。そこで住んでいる彼の3番目の叔父さんに挨拶をし、墓に向かった。共同墓地で敷地が広い。他の墓はきれいに草刈りが済んでいるのにその中で二つ、二つの墓はお互いに距離を置いていたが、人が隠れるぐらい草ぼうぼうの小さな山があった。彼の両親の墓である。彼が自分で草刈りをすると言って、草を残してもらったのだという。とっさに私は草刈りをしたい衝動に駆られた。

家族を残し故郷を後にして新天地へ向かった、もしくは行かざるをえなかった彼の父をはじめとする在日1世の心情はいかなるものか。困難だったのであろう生活の中で6人の子どもを育てあげ、今は大阪の生野で在日問題、民族教育のみにとどまらず様々な地域活動を繰り広げている。今、同志を連れて彼の父の墓を、そしてチェジュド4・3事件の犠牲者である叔父の墓参りに来ているのだ。私は彼の父と面識はないが、私が彼を知るとき、在日を知るとき、チェジュド4・3事件を知るとき、正に彼の父が私のルーツとなるのだ。

墓石には家族一同の名が刻まれてあった。父の生涯は彼に、知ろうとする私たちに、そして未来に、受け継がれて行くだろう。このチェジュドから。大きく広がる秋の空の下で、彼の父と母の冥福を心から祈った。

もう一つ、共同墓地の一番端に位置する、遠い親戚であるオ・ドゥソク氏と、彼の叔父に当たるオ・ドンシク氏の墓の前で、皆で黙祷を捧げた。チェジュド4・3事件の犠牲者である。オ・ドンシク氏は当時28才で、武装隊になった友人に食物を与えて警察につかまり、朝鮮戦争勃発により木浦での牢獄生活の末に韓国軍によって殺されたのである。チェジュド4・3事件は国からの熾烈な弾圧により封じ込められ、以後口にすることもできなかった。タブー視されたのだ。オ・ドンシク氏はどこでどのように亡くなったのか調べることもできなかった。2000年にチェジュド4・3事件真相究明委員会が発足しようやく事件の調査がなされる。

韓国の法事では儒教の習わしに従い、亡くなった人に祭儀を捧げるのだが、3番目の叔父さんが、いつも号泣したという。それが彼の、チェジュド4・3事件に関わる最初のきっかけになったんじゃないかなと言っていた。

スタディーツアーの最終日には済州4・3平和公園に行った。そこには巨大な大型祭壇と位牌奉安

所があり、犠牲者の位牌が村別に並べられていた。そこで私たちは再び二人の名前を目にした。広場の横には石の墓が広がる。そこは工事中であったが、遺体がなくて今まで墓を作れなかった犠牲者の遺族たちの強い要望によって墓が作られた。またもう一つの広場、刻名碑は、円に沿って平たい石碑が並べられ、ここにもまた村別に犠牲者の名前、性別、当時の年、死亡日時、場所が刻まれていた。“ハウオン里”には“オ・ドンシク 25才 男 1950.7日にち不詳 行方不明”、“オ・ドゥソク 32才 男 1950.8日にち不詳 行方不明”とあった。皆そこでまた、佇んでいた。唯一の、か細い紐がそこに繋がっているかのようだった。名前も分からない犠牲者（誰々の妻、誰々の子、と書かれていた）も含めてそれは2万ほどあった。それからいくつかの気づきはあったが私たちはさーっと目を通して母子像のモニュメントに向かい、飽きるほどそれを見ていた。・・・彼が来ない。案内者の韓国人がいくら腹立だしく呼んでも、「ケンチャナ、シガニイツ（大丈夫、時間ある）」と言って石碑を見ているのであった。後で聞いたら、どこの村で、あーあその村か、どのような人が、あーこんなに小さい子どもが、と一つ一つ思いを馳せながら見ていたという。私はそこまで思い入れることができなかった。韓国に住む、あるいは日本に住む犠牲者の遺族の方達にとって、ここチェジュド4・3事件平和公園そのものが墓地であり慰霊地で聖地なのだ。私は進む足をあらためた。

こうしてスタディーツアーは終わった。チェジュドは大きな傷を受けながらもその傷を癒そうと努力し、それだけにとどまらず過去から未来へ、傷を平和へと変えようとしている、偉大な島であった。

彼が私に通訳を頼んだだけは、思い入れが強すぎる事については感情移入してしまって、通訳ができなくなるからということだった。私はそれを見た。彼は痛みを抱きながら現在の社会に問題を投げ掛け、また私たちにも投げ掛ける。おそらく莫大なエネルギーを消費しながら。そのエネルギーの元が、前号に書かれた“子どもたちには私のような思いをさせたくない一念”ではないだろうか。私は彼らの傷が平和へと変わることを願うし、共に歩いて行きたい。

ルーツがチェジュドの在日2世で生野センター総主事、在日本チェジュド4・3事件遺族会会長で、アジア夏期学校校長で、韓国が好きで、お酒が好きで、冗談が好きで、娘にはデレデレで、人々の様々な「きっかけ」になりうる、彼の名前はオ・クアンヒョン。

（なかむら かおり 韓国在住）

蓮池透・太田昌国『拉致対論』(太田出版)

磯貝 治良

問題に向き合う私たちのスタンスと反省、そして解決への心構えと行動について、解りやすく示唆してくれる。対話者二人の言説は良心から発しているからだ。

たとえば、日本人として拉致問題に向き合うとき、植民地支配による加害の具体を同時に引き受けることの必要性が、くりかえし強調される。そのうえで拉致事件を追及し、解決を図る。加害一被害の関係を一方化するのではなく、いわば双方向で向かい合おうとする思考である。蓮池さんは、それを弟薫さんの考え方に触発されて「複眼の思考」と呼ぶ。

だから、植民地支配とその責任についてあまりにも蒙昧な日本政府に対する批判はきびしい。歴史認識についてだけではない。その延長としてある、拉致問題解決に対応する日本政府の外交不在、無策に対してもまっとうな批判がなされる。「北朝鮮による拉致被害者を救う会」に対する批判もまっとうになされる。北を敵視する「救う会」が右翼的・好戦的なイデオロギーを行動化するために「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」を利用し、支配している実態がなまなましく明かされる。安部普三、故中川昭一といった政治家の「罪」に対する批判も妥協がない。

私がこの対論を読み終えて最も印象づけられたのは、かつて「家族会」事務局長として画一的な発言をしていた蓮池透さんの思想の「変化」である。被害者の家族という、ともすれば怨念に縛られやすい立場から、現在の思想に至る過程は、人としてなしえた「変革」ではないだろうか。その「変革」が弟・薫さんとの親和と意見対立という、兄弟の絆を経てなされたことに、重みを感じる。

拉致問題解決の正道は対話と交渉なのだ。
(いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表)



2002年9月17日に小泉首相(当時)が訪朝して、戦後／解放後の日朝関係において画期的な首脳会談が行なわれた。「ピョンヤン宣言」が交わされたが、会談のなかで金正日総書記が日本人拉致を認めて謝罪した。その日から日本列島をおおった北朝鮮バッシングは背筋を寒くした。為政者と国民を一色にした思考停止は、この国と社会の生態をあらわにして、危機だと感じたからだ。

そんな状況のなかで私もいろいろ語り、書いた。その際には、戦後／解放後における東アジアの冷戦体制と日本政府の対朝鮮半島政策、そして私たち日本人の立ち位置にふれることにした。

日本(人)はアメリカの傘のもとに冷戦の悲劇をまぬがれた。朝鮮戦争では甘い汁を吸いつくし、朝鮮半島の分断をよしとする北敵視政策を固持してきた。「冷戦の孤島」と言われるほどに、いまでも分断思考から抜けられずにいる。北が拉致事件を起こした70年代、朝鮮半島はまだ第2のユギオ(朝鮮戦争)を想像させる状況にあった。日本が冷戦＝分断思考を克服して北とも国交を結び、平壤に大使館があり、サシで対話をできる関係だったなら、拉致はなかったはずだ。

拉致事件は明らかな国家犯罪だから、それを容認することはできない。ただ、拉致問題を考えるとき、上記の観点が同時に必要だろう。北に対して「制裁、制裁」の一辺倒では拉致問題は解決しない。むしろ特定のイデオロギーを満足させるために、解決を妨げているように見える。国交正常化と対話こそが、解決への有効な入口なのだ。

本書では戦後／解放後の日本の冷戦思考、朝鮮半島政策にはほとんど触れられていないが、拉致

たやすく書かれた詩

尹東柱

窓の外では夜の雨がささやき
六畳の部屋は他人の国、

詩人とは悲しい天命であることを知っていても
一行の詩を書きとめてみるか、

汗のにおいと愛の香が穏やかに漂う
送ってくれた学費の封筒を受けとり

大学ノートを脇に抱えて
老教授の講義を聴きに行く。

思い返せば幼なじみを
ひとり、ふたりとみなしい

僕はなにを望み
僕は一人でなに思いしずむのか

人生は生きがたいものなのに
詩がこんなにもたやすく書かれてしまうのは
恥ずかしいことだ

六畳部屋は他人の国
窓の外では夜の雨がささやいているが、

灯りをともして暗闇を少し追いやって
時代のよう訪れる朝を待つ最後の私、

僕は僕に小さき手をさしのべて
涙と慰めでにぎる最初の握手。

尹東柱 (ユン・ドンジュ)
1917年、旧満州の北間島で生まれる。1938年、ソウルの延禧専門学校(現代の延世大学)文科に入学。在学中に、朝鮮語授業の廃止、創氏改名(彼も平沼東柱と改名)を体験した。1942年日本に渡り、立教大学英文科選科に入学。その9月、京都に移り、10月同志社大学英文科選科に入学。1943年、7月同志社大学在学中に治安維持法違反で京都下鴨警察署に逮捕され、祖国解放を半年後に控えた1945年2月16日 旧福岡刑務所で獄死した。民族詩人として韓国では最も愛されている詩人であり、ゆかりの地(中国東部の龍井、延世大学、同志社大学、京都の下宿跡)等には彼を偲ぶ碑が建立されている。

2009年10月18日の大阪教区礼拝で韓国の柳時京司祭が説教で詩人尹東柱のことを語りました。今回はそのことを思いこの詩を掲載しました。この詩は創氏改名をせざるを得なかった日本の地での彼の無念が私に響いて来ます(訳者: 呉光現)

呉光現

今年、日本は本格的な政権交代がありました。「マニフェスト選挙」でもありましたが、朝日新聞のWebサイトではすべての候補者にアンケートがありそのうちの項目が「在日外国人の地方参政権」の是非についてでした。政党によっては同一の回答もありましたが、民主、自民の両政党は候補者個人の考えが反映されていました。大まかに言うと民主は賛成が多く、自民は反対が多かったといえます。

2000年に韓国では済州四三事件犠牲者の名誉回復と真相究明に関する特別法が全会一致で国会を通過しました。当時の大統領は金大中氏。解放直後の左右の対立から武装蜂起、大虐殺と韓国の戦後史のなかでも最も悲劇的な事件です。金大統領はこの法律の成立に向けて「全会一致」を目指しました。それはひとえに「和解」を進

和解と共生のしるしとして「全会一致」を

めるためだったのです。革新・保守の垣根を越えて作られたこの法律は現在の保守政権下にあっても様々な課題はありつつも効力を発揮しています。それは「全会一致」で成立したことと無関係ではありません。

私は外国人の地方参政権の制度化に対して「全会一致」を願っています。理由は韓国の「済州四三事件特別法」にその精神を見るからです。それはまさに「和解」と「共生」の第一歩だからと思うからです。外国人の地方参政権の制度化が「対決法案」になり「数の力」で押し切ったら、国政・地方も含めて参政権のない私にとっては辛いものです。連立政権ですが圧倒的多数を占める民主党が粘り強く対話を進めて、反対する政党がなくなり「全会一致」で私たちに権利の1つを付与できないでしょうか？それは同時に日本社会のあり方も変えていける力になると信じています。（お くあんひょん）

クリンもだん美術教室から



中学からクリンもだんに通っている江之口峻史さん。今年念願の個展を開催。ムードメーカーです。

余韻

■「自分のことは恥ずかしい」。今回は中村さんが僕のことを書きました。遊びが好きで、酒が好きで、50を越えても時々羽目を外してしまう。先日、友人と一献を傾けて、帰ろうとしたら12時頃。いつも家の近くで飲むので「終電」を気にしないのが痛飲のもと。携帯が鳴って懐かしい友人が飲んでいる店に行く羽目に……。帰宅は遅くなってしまった。その友人が辛い状況だという。だから深夜でも行ったけど……。家族にはゴメンね、です。■成人になった娘とお酒を飲んだ。子どもが生まれた時の願いが一つ叶った。理由はいらない。ただ嬉しい。（びっくあんちゃ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 10,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円から
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
普通預金 4654965 「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0002
大阪市生野区小路3丁目11番19号
TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869
E-mail: ikuno@nssk.org
http://www.nssk.org/province/ikuno
発行人：大西 修
編集人：大橋 襄